

ヤコブの手紙

第一章 神と主イエス・キリストとの僕ヤコブから、離散している十二部族の人々へ、あいさつをおくる。

二 わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。三 あなたがたの知っているとおり、信仰がた

めされることによって、忍耐が生み出されるからである。四 だから、なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように、その忍耐力を十分に働かせるがよい。

五 あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであらう。六 ただ、疑わないうで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。七 そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。八 そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない。

九 低い身分の兄弟は、自分が高くされたことを喜びなさい。一〇 また、富んでいる者は、自分が低くされたことを喜ぶがよい。富んでいる者は、草花のように過ぎ去る

からである。二 たとえば、太陽が上って熱風をおくると、草を枯らす。そしてその花は落ち、その美しい姿は消えうせてしまう。それと同じように、富んでいる者も、その一生の旅なかばで没落するのであらう。

三 試練を耐え忍ぶ人は、さいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであらう。四 だれでも誘惑に会う場合、「この誘惑は、神からきたものだ」と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもない。五 人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。六 欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。七 愛する兄弟たちよ。思い違ひをしてはいけない。

八 あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない。九 父は、わたしたちを、いわば被造物の初穂とするために、真理の言葉によって御旨のまに、生み出して下さったのである。

一〇 愛する兄弟たちよ。このことを知っておきなさい。人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである。二 人の怒りは、神の義を全うするものではないからである。三 だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたの

たましいを救う力がある。三そして、御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけない。三三おおよそ御言を聞くだけで行わない人は、ちやうど、自分の生れつきの顔を鏡に映して見る人のようである。二四彼は自分を映して見てそこから立ち去ると、そのとたんに、自分の姿がどんなであつたかを忘れてしまふ。二五これに反して、完全な自由の律法を一心に見つめてたゆまぬ人は、聞いて忘れてしまふ人ではなくて、実際に言う人である。こういう人は、その行いによつて祝福される。

二六もし人が信心深い者だと自任しながら、舌を制することをせず、自分の心を欺いているならば、その人の信心はむなしものである。二七父なる神のみまえに清く汚れの無い信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。

第二章 わたしの兄弟たちよ。わたしたちの

栄光の主イエス・キリストへの信仰を守るのに、分け隔てをしてはならない。二たとえば、あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな着物を着た人がはいつて来ると同時に、みすばらしい着物を着た貧しい人がはいつてきたとする。三その際、りっぱな着物を着た人に対しては、うやうやしく「どうぞ、こちらの良い席にお掛け下さい」と言い、貧しい人には、「あなたは、そこに立つて

いなさい。それとも、わたしの足もとにすわっているがよい」と言つたとしたら、四あなたがたは、自分たちの間で差別立てをし、よからぬ考へで人をさばく者になつたわけではないか。五愛する兄弟たちよ。よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富ませ、神を愛する者たちに約束された御国の相続者とされたではないか。六しかるに、あなたがたは貧しい人をはずかしめたのである。あなたがたをしいたげ、裁判所に引きずり込むのは、富んでいる者たちではないか。七あなたがたに対して唱えられた尊い御名を汚すのは、実に彼らではないか。八しかし、もしあなたがたが、「自分を愛するよう、あなたの隣り人を愛せよ」という聖書の言葉に従つて、このきわめて尊い律法を守るならば、それは良いことである。九しかし、もし分け隔てをするならば、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によつて違反者として宣告される。一〇なぜなら、律法をことごとく守つたとしても、その一つの点にでも落ち度があれば、全体を犯したことになるからである。二たとえば、「姦淫するな」と言われたかたは、また「殺すな」とも仰せになつた。そこで、たとい姦淫はしなくても、人殺しをすれば、律法の違反者になつたことになる。三だから、自由の律法によつてさばかるべき者らしく語り、かつ行いなさい。四あわれみを行わなかつた者に対しては、仮借のなさはきが下される。あわれみは、さばきにうち勝つ。

「四 わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰がある
と称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立
つか。その信仰は彼を救うことができるか。二五 ある兄弟
または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いてい
る場合、二六 あなたがたのうち、だれかが、「安らかに行き
なさい。暖まって、食べ飽きなさい」と言うだけで、そ
のからだに必要なものを何ひとつ与えなかったとした
ら、なんの役に立つか。二七 信仰も、それと同様に、行い
を伴わなければ、それだけでは死んだものである。二八 し
かし、「ある人には信仰があり、またほかの人には行いが
ある」と言う者があるう。それなら、行いのないあなた
の信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの
行いによって信仰を見せてあげよう。二九 あなたは、神は
ただひとりであると信じているのか。それは結構であ
る。悪霊どもでさえ、信じておののいている。三〇 ああ、
愚かな人よ。行いを伴わない信仰のむなししいことを知り
たいのか。三一 わたしたちの父祖アブラハムは、その子イ
サクを祭壇にささげた時、行いによって義とされたので
はなかったか。三二 あなたが知っているとおり、彼におい
ては、信仰が行いと共に働き、その行いによって信仰が
全うされ、三三 こうして、「アブラハムは神を信じた。それ
によって、彼は義と認められた」という聖書の言葉が成
就し、そして、彼は「神の友」と唱えられたのである。
三四 これでわかるように、人が義とされるのは、行いによ

るのであって、信仰だけによるのではない。三五 同じよう
に、かの遊女ラハブでさえも、使者たちをもてなし、彼
らを別な道から送り出した時、行いによって義とされた
ではないか。三六 靈魂のないからだは死んだものであると
同様に、行いのない信仰も死んだものなのである。

第三 三章 一 わたしの兄弟たちよ。あなたがたの

うち多くの者は、教師にならないがよい。わたしたち教
師が、他の人たちよりも、もっときびしいさばきを受け
ることが、よくわかっていからである。二 わたしたち
は皆、多くのあやまちを犯すものである。もし、言葉の
上であやまちない人があれば、そういう人は、全身を
も制御することのできる完全な人である。三 馬を御する
ために、その口にくつわをはめるなら、その全身を引き
まわすことができる。四 また船を見るがよい。船体が非
常に大きく、また激しい風に吹きまくられても、ごく
小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される。
五 それと同じく、舌は小さな器官ではあるが、よく大言
壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を
燃やすではないか。六 舌は火である。不義の世界である。
舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたもの
であるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地
獄の火で焼かれる。七 あらゆる種類の獣、鳥、這うもの、
海の生物は、すべて人類に制せられるし、また制せられ
てきた。八 ところが、舌を制しうる人は、ひとりもない

い。それは、制しにくい悪であって、死の毒に満ちている。わたしたちは、この舌で父なる主をさんびし、また、その同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている。同じ口から、さんびとのろいとが出て来る。わたしの兄弟たちよ。このような事は、あるべきでない。二泉が、甘い水と苦い水とを、同じ穴からふき出すことがあるのか。三わたしの兄弟たちよ。いちじくの木がオリブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができようか。塩水も、甘い水を出すことはできない。

三あなたがたのうちで、知恵があり物わりのよい人は、だれであるか。その人は、知恵にかなう柔和な行いをして、よい生活によって示すがよい。四しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや党派心をいだいているのなら、誇り高ぶってはならない。また、真理にそむいて偽ってはならない。五そのような知恵は、上から下ってきたものではなくて、地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なものである。六ねたみと党派心のあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為とがある。七しかし上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い。八義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである。

第四章

一あなたがたの中の戦いや争いは、

いったい、どこから起るのか。それはほかではない。あなたがたの肢体の中で相戦う欲情からではないか。二あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。あなたがたは、求めないから得られないのだ。三求めても与えられないのは、快樂のために使おうとして、悪い求め方をするからだ。四不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。五それとも、「神は、わたしたちの内に住ませた霊を、ねたむほどに愛しておられる」と聖書に書いてあるのは、むなししい言葉だと思ふのか。六しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。七そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げるであろう。八神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう。罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ。九苦しめ、悲しめ、泣け。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えよ。一〇主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなたがたを高くして下さるであろう。二兄弟たちよ。互に悪口を言い合ってはならない。兄弟の悪口を言ったり、自分の兄弟をさばいたりする者は、

律法をそしり、律法をさばくやからである。もしあなたが律法をさばくなら、律法の実行者ではなくて、その審判者なのである。三しかし、立法者であり審判者であるかたは、ただひとりであつて、救うことも滅ぼすこともできるのである。しかるに、隣り人をさばくあなたは、いったい、何者であるか。

三よく聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一か年滞在し、商売をして一もうけしよ」と言う者たちよ。四あなたがたは、あすのことからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない。五むしろ、あなたがたは「主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう」と言うべきである。六ところが、あなたがたは誇り高ぶっている。このような高慢は、すべて悪である。七人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼にとつて罪である。

第五章 「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分の身に降りかかるうとしてゐるわざわいを思つて、泣き叫ぶがよい。二あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、三金銀はさびてゐる。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にゐるのに、なお宝をたくわえている。

四見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにゐる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。五あなたがたは、地上でおごり暮し、快樂にふけり、「ほふらるる日」のために、おのが心を肥やしてゐる。六そして、義人を罪に定め、これを殺した。しかも彼は、あなたがたに抵抗しない。

七だから、兄弟たちよ。主の來臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。八あなたがたも、主の來臨が近づいてゐるから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい。九兄弟たちよ。互に不平を言い合つてはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主が、すでに戸口に立つておられる。一〇兄弟たちよ。苦しみを耐え忍ぶことについては、主の御名によつて語つた預言者たちを模範にするがよい。二忍び抜いた人たちはさいわいであると、わたしたちは思う。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になさつたことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみに富んだかたであるかが、わかるはずである。三さて、わたしの兄弟たちよ。何はともあれ、誓いをしてはならない。天をさしても、地をさしても、あるいは、そのほかのどんな誓いによつても、いっさい誓つてはならない。むしろ、「しかり」を「しかり」とし、「否」

